

2020. 6. 7 (日) マタイ 20 : 24 ~ 28

20:24 ほかの十人はこれを聞いて、この二人の兄弟に腹を立てた。

20:25 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているとおおり、異邦人の支配者たちは人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています。

20:26 あなたがたの間では、そうであってはなりません。あなたがたの間で偉くなりたと思う者は、皆に仕える者になりなさい。

20:27 あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。

20:28 人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。」

<説教>

先々週の続きです。

20:24 ほかの十人はこれを聞いて、この二人の兄弟に腹を立てた。

「この二人の兄弟」(24)とは一すでに見たように一十二弟子の中の「ゼバダイの息子たち」(20)であるヤコブとその兄弟ヨハネです。

彼らは、イエスがやがて栄光の座に着くそのときにそれぞれがイエスの右と左に座れるように、我先にとイエスの約束を取り付けようとしていました。

しかしイエスは、「あなたがたは自分が何を求めているのか分かっていません。」(22)、「わたしの右と左に座ることは、わたしが許すことではありません。わたしの父によって備えられた人たちに与えられるのです。」(23)と言われて、彼らの願ったようには彼らに答えてくさいませんでした。

「求めても得られないのは、自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求めるからです。」(ヤコブ 4:3)と後に主の兄弟ヤコブは言っています。

イエスが、ご自分はユダヤ人指導者たちによって死刑に定められ、異邦人に引き渡され、嘲られ、むちで打たれ、十字架につけられるという、人間として最低の、いやもはや人間扱いではないと言えるほど低くされることになるということを弟子たちにお話になった直後にしてのこのような弟子たちの姿でした。

「ほかの十人」は「この二人の兄弟」の考えたことしたことがイエスの弟子としてふさわしくないと考えたから「腹を立てた」のではありませんでした。

「ほかの十人」も心の中では「この二人の兄弟」と同じことを考えていたのであり、ただ単に先を越された、出し抜かれた、あの二人だけ先にずるい、というような全く自己中心な思いからだったのでしょう。

それで、イエスはなお彼らにお語りになり、戒め、みこころをお教えになりました。

20:25 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているとおおり、異邦人の支配者たちは人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふる

っています。

20:26a あなたがたの間では、そうであってはなりません。

「あなたがたの間では、そうであってはなりません。」ということは、現実には「あなたがたの間では、そう」になっている、ということにほかなりません。

「異邦人の支配者たちは人々に対して横柄にふるまい（「押しえつけ」使徒 19:16）、偉い（偉大な）人たちは人々の上に権力をふるって」ることを「あなたがた」は「知っている」とイエスは言われます。

「知っている」とは「分かっていない」（22）の「分かる」と同じ言葉です。

「自分が何を求めているのか」分かっていない、知らないようなあなたがたも、「異邦人の支配者たち」「偉い人たち」のしていることは「知っている」、分かっていると言われるのです。

真の神を知らない、この世の「異邦人の支配者たち」「偉い人たち」の「支配」原理、何が「偉い」ということなのかの基準はとても分かりやすいのです。

なぜなら人間の生まれながらの思い願い欲望にぴったりと沿うものだからです。

人々をありとあらゆる力で、ときに飴で、ときに鞭で、上から押しえつけ「人々の上に権力をふるう」、そうやって世の中と人々を自分の思い通り操り、支配したい。あの人は大きな力ある偉大なお方だ、と人々から崇めてもらいたい、仕えてもらいたい。

そんな思い願い、欲望です。

そんな「異邦人の支配者たち」「偉い人たち」が目差し行っていることと全く同じことを「あなたがた」も思い描き願い目指しているのではないか、とイエスは言われるのです。

またこう言っておられるようでもあります。

もしかしたら普段から「人々に対して横柄にふるまい」「人々の上に権力をふるって」る「異邦人の支配者たち」「偉い人たち」を「あなたがた」はユダヤ人としてはなおさらのこと一いまいましく憎々しく思っているのではないか。

なのに、神の民を自認しているはずのユダヤ人の「あなたがた」の願い目指していることも実はそんなこの世の「異邦人の支配者たち」「偉い人たち」と全く“同じ型”ではないか。

それは一体どうしたことか。

そんなのは「あなたがた」神の民にはふさわしくない。わたしを「生ける神の子キリスト」と告白する者、自分を捨てて自分の十字架を負ってわたしに従うように召されている者にはふさわしくない。

「あなたがたの間では、そうであってはなりません。」

では神の民である者、イエスの弟子として召された者は、どうあるべきでしょうか、どうあるほかないというのでしょうか。

イエスは言われます。

20:26b あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。

20:27 あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。

「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は」、「皆から仕えられる者」ではなく、「皆に仕える者」になりなさい。

むしろ、「皆に仕える」ことにおいてこそ大きな者、偉大な者になりなさい。大いに「皆に仕える者」になりなさい。

「あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は」、「皆をしもべにする者」ではなく、「皆のしもべ」になりなさい。

むしろ、「皆のしもべ」であることにおいてこそ先頭に立ちなさい、先の者になりなさい、一番になりなさい。先頭を切って「皆のしもべ」になりなさい。

そうイエスは言われたのです。

このように、「偉大な者」また「先頭の者」の基準が、神の国（神の御支配）とこの世の国（この世の支配）では全然違う、全く正反対だとイエスは言われるのでした。

ではそう言える根拠、証拠は何か、どこにあるか。

それはわたし自身だ、わたしにある、とイエスは言われるのです。

20:28 人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。」

永遠の栄光ある神の御子であられるイエスが「人の子」としてこの世に「来た」のは「仕えられるためではなく仕えるため」でした。

「ああ、不信仰な曲がった時代だ。いつまであなたがたと一緒にいなければならないのか。いつまであなたがたに我慢しなければならないのか。」(17:17)と言いつつ、イエスは弟子たちを教育なさっておられました。

それもイエスが弟子たちの「仕える」ひとつのあり方だったと言えるでしょう。

神の民であるはずなのに「支配」とか「権威」とか「偉大」とか「先頭」とかいうことについて異邦人と同じ型でしか考え行動することができない弟子たちをイエスは我慢してなおも「彼らと呼び寄せて」(25) 語り、へりくだって、柔和に忍耐強くお教えになるのでした。

「わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。」(11:29)と言われた通りイエスはなさるのでした。

そしてイエスのご自分が弟子たちに「仕える」仕え方として一番大きなことがあることを明らかになさいました。

それは、ご自分が「十字架につけ」(19)られて「多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与える」ことでした。

そのためにご自分はこの世に「来た」と仰ったのです。

「贖いの代価」とは、奴隷などを解放するための身代金（みのしろきん）のことですが、ここでは弟子たち（そして私たち）罪人を罪と悪魔の奴隷から解放するためのものです。

弟子たちのような罪ある「多くの人のため」に彼らの罪を日々イエスはその身に負われ、同時に父なる神に完全な従順の生涯を歩んでおられたのでした。

そして十字架でご自身を罪なき完全ないけにえとして「自分のいのち」を神にお捧げになろうとしておられました。

弟子たち罪人のために、彼らの罪を負って十字架で死んでくださり、三日目に墓からよみがえられるのです。

そのイエスを信じる弟子たちにイエスは「**自分のいのち**」、永遠の命を与えてくださるみこころでした。

ただこのイエスのゆえに、神は罪人である弟子たちの罪を赦してくださり、イエスと同じ神に従順な者として彼らを受け入れてくださるみこころでした。

そのようにまずイエスが弟子たち罪人—私が私がいつも自分のことばかりを考え、自分が何か偉い者でもあるようにうぬぼれ、高ぶり、いつもすきあらばなにがしかの権力をふるって人を押さえつけようと狙っている、この世と同じ型で生きようとする罪人—に仕えてくださったのです。

そうやって彼らがこの世と世の欲とともに滅びることから救ってくださるのでした。

「**あなたがたの間では、そうであってはなりません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。**」というイエスのみことばを聞いて初めは弟子たちはイエスが何を言っておられるのか「分かっていません」でした（はずです）。

しかし後に聖霊の力によって、自分たちがいかにイエスによって仕えていただいたか、仕えていただいているかを知った、分かったのです。

聖霊の力によって彼らはイエスのみことばとみわざを思い起こし、ますます神を知る者とされ、死に至るまで従順にイエスのみことばに従う者とされました。

そして、初めは彼ら自身考えもつかなかった者、なりたいたとも思わなかつた者、いやむしろそんな地味で目立たず損な役回りは嫌だと忌み嫌っていた者、すなわち「**皆に仕える者**」「**皆のしもべ**」へと聖霊によって変えられたのです。

それは、弱く鈍く愚かな罪人である弟子たちのために十字架で「**贖いの代価**」を払ってくださったイエスにある神の奇蹟のみわざでした。

ならばあの弟子たちと全く同じく罪深く、弱く鈍く愚かな今の私たちにも望みがあります。

同じイエスの十字架の死とよみがえりによって贖われた私たちもまた同じ聖霊の力によってイエスと同じような者、イエスに倣う者、「**皆に仕える者**」「**皆のしもべ**」へと造り変えられるのです。

それが私たちに対する神の、イエス・キリストにある全き善きみこころなのです。